

目次	1	CAMPUS Asia プログラム始動 [小川琴子]
	2	研究室の窓から [田中弥生] / My Wonderful Experiences in Japan [Endah Sari Utami]
	3	学生インタビュー [三澤史明さん]
	4	「事例研究(現代行政I)」ゼミ合宿 [武藤 淳] / トピックス

CAMPUS Asia プログラム 始動

小川琴子 国際企画チーム プログラム・マネジャー



文部科学省の2011年度大学の世界展開力強化事業のひとつ「CAMPUS Asia パイロットプログラム」は、日中韓の各国政府が自国と相手国の学生に財政的支援を与えて学生のモビリティ(流動性)を高めることを目的としたトライアングル交流事業です。このCAMPUS Asia パイロットプログラムに、公共政策大学院(GraSPP)の『BESETO(Beijing-Seoul-Tokyo)ダブル・ディグリー・マスター・プログラム(BESETO-DDMP)』が選ばれました。このプログラムはGraSPP、北京大学国際関係学院、ソウル大学国際大学院の3校が行う、初めての英語による交換留学及びダブル・ディグリーを軸とした先例のない取り組みです。

BESETO-DDMPでは、学生は交換留学または「ダブル・ディグリー(出身大学の修士号に加えもう1校の修士号を取得)」のどちらかを選びます。どの学生も必ず3ヶ国で学ぶことが義務づけられています。例えばGraSPPで1年間学び、GraSPPに在籍しながら北京大学国際関係学院とソウル大学国際大学院に1年間もしくは1学期間留学します。3校での授業は基本的にすべて英語です。1年間留学した方の大学で条件をクリアすれば、最短2年半でGraSPPを含む大学院2校の修士号を取得するダブル・ディグリーも可能となります。アジアトップクラスの大学院3校による英語でのダブル・ディグリーという点で画期的なプログラムです。

留学先ではそれぞれの国の文化や慣習に触れられるようしくみも考えられています。教育の基本言語は英語ですが、初級レベルの日本語、中国語、韓国語を学ぶ機会の提供や、留学生の希望者には、各国の現地企業や国際機関等でのインターンシップを行えるよう受け入れ先機関の開拓等の準備が進められています。さらに、各国のアカデミックカレンダー(学期制)の違い(ソウル大学は3月始業、東京大学は4月及び10月始業、北京大学は9月始業)を有効に活用し、3校の学生が一堂に会して学ぶサマープログラムが毎年開催される予定です。第1回のサマープログラムは、ソウル大学国際大学院で今年の8月1日から13日まで開催され、GraSPPからは14名が参加します。

GraSPPの学生の場合、授業料は留学期間も含めて東京大学のみ納め、北京大学とソウル大学校では免除されます。また、2015年度までに参加した学生は留学時の航空運賃や生活費の一部に対し、3ヶ国の補助金から財政的な支援が受けられます。

GraSPPでは、2013年4月からCAMPUS Asiaの構想に基づいたカリキュラムで、北京大学国際関係学院とソウル大学国際大学院への留学を前提とする「公共政策キャンパスアジアコース(Master of Public Policy, Campus Asia Program, MPP/CAP)」がスタートします。各国の優秀な学生たちとネットワークを築き、21世紀のアジア、ひいては21世紀の世界を担うリーダーを育成する場として大きな期待が寄せられています。



北京大学国際関係学院



ソウル大学国際大学院

研究室の窓から

第 4 回

非常勤講師

田中弥生

独立行政法人大学評価・学位授
与機構准教授



東大生のパブリック・マインド

「ボランティアですか？ 東大生は条件のよいアルバイトに恵まれているので応募しないかもしれませんよ」。1998年に大学生がNPOでボランティアに従事するための奨学金制度を日産自動車が創設し、各大学に協力を求めた際に、東大から戻ってきた反応である。ボランティアといえば草の根の泥臭い活動というイメージがある。東大関係者にとって、そつなく物事をこなす東大生のイメージとボランティアが結びつきにくかったのだろう。しかし、実際には、数多ある都内の大学の中でも東大生の応募が最も多かったのだ。

東大には官僚志望の学生が多いが、その理由のひとつは公益的な仕事に就きたいというパブリック・マインドである。そうしたマインドをもつ学生がボランティア活動に興味を示すことはごく自然なことにみえる。

あれから15年、ボランティア経験のある東大生は圧倒的に増えた。しかし、何よりも興味深いのは活動スタイルの変化だ。以前のボランティアは与えられた仕事をこなすタイプが殆どであった。しかし、最近はこうした指示待ちスタイルでは満足しないようだ。彼らは課題が与えられると、その解決方法を自分でデザインし、主体的に実施することを好む。そのプロセス自体を楽しんでいるようにさえみえる。東日本大震災を契機に東大生が設立した「Youth for 3.11」*も好例だ。素人が被災地に行くことは困難と言われる中で、1万人以上の未経験の学生を被災地に効果的に派遣する仕組みを作り専門家たちを驚かせた。

東大生は、そのパブリック・マインドを発揮する場やスタイルを、私たちが想像する以上に感度よく進化させているのではないだろうか。

*Youth for 3.11 / 学生が参加しやすいボランティア・プログラムを提供する団体。 <http://www.youthfor311.com/>

My Wonderful Experiences in Japan

Endah Sari Utami (2nd Year, MPP/IP)

It is very difficult to describe my two-year experience in Japan in words, but maybe "I am one of the luckiest Indonesian students in the world" is the most suitable words to express how I feel. Yes, I am very lucky not only because I was able to obtain a scholarship to pursue my master's degree in the best university in Japan but also I had a chance to directly feel the great culture of the country. Back then, two years ago, actually I was not sure if I can survive in Japan because of my inability to speak Japanese. Fortunately, the uncertainty soon disappeared when I received the warmest welcome upon arrival in Japan. My tutor taught me about Japanese basic customs and helped with all of my settling process. The administration staff members and faculty members of GraSPP showed full dedication and did hard work to make all international students feel comfortable in their new environment by removing constraints within the campus as much as possible. One of the most touching experiences during that time was that GraSPP office provided a praying space for me. That really surprised me, and I was moved to realize how a monoculture country can appreciate diversity. That experience taught me tolerance which I think will be difficult to find in other countries.

The second miracle happened to me May 2011, just after the great disaster in Tohoku. I found that I was pregnant. I was really happy since I had been waiting for years for this miracle. But then, I became very afraid if I was able to get through my pregnancy process. When I experienced a miscarriage before, I received full support from my family in Indonesia; this time I had to struggle alone in a country whose language I cannot speak, against an uncertainty about radiation condition in my area. Most of the English-language media, my only information source, gave me scary news, but I had a huge responsibility to finish my study. Fortunately my worries did not last long since I got a lot of support from GraSPP administration staff members, classmates and professors who shared their knowledge and experiences about child rearing in Japan. Now I am very grateful not only because I have a cute and healthy son but also I have had very wonderful experiences with the Japanese prime, professional and fast healthcare and public service system. I hope I can share all of my valuable experiences here when I go back to my country to promote a better public service system.



— 就職は広告代理店に決まったそうですね。

もともと僕は観光を政策の観点から学びたくてGraSPPに入りました。ところがGraSPPには観光と銘打った授業がなく、社会人を対象とした工学部の東大まちづくり大学院 (<http://www.due.t.u-tokyo.ac.jp/mps/index.html>) の「都市の文化・観光政策」という授業を取りました。社会人の生徒さんからいろいろな話を伺うことができたのが本当に大きな収穫でした。広告代理店を就職先に考え始めたのも、ある生徒さんから「広告代理店にもソフト面からの観光に携わることができるよ」と教えて戴いたのがきっかけです。立案された政策を具体的なアクションに落とし込めるのは代理店だろうと。勉強を進めていくにつれて、公共政策との親和性が高いなと思ったのです。

島が好きで、日本全国の島を回っているうちに、コンサルタントや国の政策は現実とのずれがあると感じ始めました。核となるコンセプトを多様なステークホルダーで共有して、観光まちづくり展開していくには、キャッチコピーやビジュアルで訴えかける広告という手段が効果的だろうという結論に至りました。



のばしていた髭と髪を
ぱっさり切って臨んだ就職活動



学 生 インタビュー

第 12 回

三澤史明さん

公共管理コース2年



ガンジス川でバタフライ

— 離島を語らせたなら右に出る人はいないとか。

最近では島根県にある隠岐島の海士(あま)町にいきました。離島は政策立案等を外部のコンサルタントに依頼することが多いらしいのですが、この島は自らで政策立案しています。「総合振興計画」にはコミュニティデザイナーの山崎亮さんも参加しているそうです。また、博報堂生活総合研究所と共同開発した母子手帳はお母さん同士の情報共有とコミュニケーションが可能になるということで、かなり評判になったと聞きました。

離島の情報を収集するため、島に足を運ぶのはもちろん、季刊『しま』のありったけのバックナンバーを読み、理学部図書館に通ったり、財団法人日本離島センターと国土交通省が主催する島の祭典、アイルンダーに行ったりしています。日本離島センターに1時間の予定でヒアリングに行ったら、担当者の方と話が盛り上がり、気づいたら3時間半も経っていたということもありました。

周りの人間に「島を見ずして日本人と言えるか!」とか「アメリカやヨーロッパに行く前に日本の島に行け!」とけしかけていますが、反応ははかばかしくありません(笑)。僕は(慶應義塾大学)学部生のときに1年間にわたってユーラシア大陸、アフリカ大陸を旅しました。世界最古の教会があると言われるアルメニア、観光まちづくりに興味をもつきっかけとなったイスラエル、ケニアでのサファリなど各地を遍歴しましたが、最後にたどりついたのが自然文化豊かな日本の島でした。島にしばらくいてから町に戻ると、感性が研ぎ澄まされるのか、世界が違って見えて新鮮で面白いんです。島に行くたびに新たな感動と発見があり、日本という国の幅広さ、奥深さを実感しています。魅力に満ち溢れている宝箱だと思います。

(インタビュー・文責 編集担当)

「事例研究(現代行政I)」ゼミ合宿

武藤 淳 2011年度公共管理コース修了、現NPO法人職員



増田寛也客員教授の事例研究(現代行政I)では2012年3月26日~27日、新潟県中魚沼郡津南町でゼミ合宿を行いました。ゼミ生の桑原悠さん(2011年度法政策コース修了)が2011年10月の津南町議会議員選挙でトップ当選を果たし、ゼミの様子も含めマスコミで取り上げられ話題になりました。

大変お忙しいなか、増田先生も合宿に駆けつけて下さいました。参加者は農家の方々とお話を伺うなど、町の様子を見学させて頂きました。津南町は日本有数の豪雪地帯として知られ、3月下旬にもかかわらず約2m50cmの積雪がありました。26日は夕刻から増田先生による「町づくり講演会」が、津南町文化センターホールにて全町民を対象に開催されました。津南町が「平成の大合併」においても周辺自治体と合併せず、「自律」の道を選択した経緯を踏まえ、どうすれば町は自律できるのかという観点から、「自律する町 津南へ」とのタイトルで講演が行われました。会場には町議会議員や町役場職員の方々、多くの町民の皆さんが集まり、講演会は大盛況でした。引き続き公民館で行われた桑原さんと恩田稔議員の町政報告会でも、増田先生は町民の方々と対話されました。私達ゼミ生は皆さんの活発な議論を間近で拝見し、町政に対する理解を深めることができました。

翌日は、恩田議員に町内各所をご案内戴きました。景勝地である秋山郷などを巡り、雄大な自然を満喫しました。少子化により廃校となった小学校では、校庭の雪山に「かんじき」を履いて登りました。校舎は内部も大切に保存されており、現在は都会の子どもたちの農村体験などに利用されているとのこと。このように、施設の有効活用の方法を皆で知恵を出し合って考えていく必要性を実感しました。限られた時間ではありましたが、大変充実した2日間でした。

本ゼミでは地方自治をテーマに、国の地方自治政策や自治体が直面している様々な課題について分析や議論を重ねてきましたが、今回のゼミ合宿はその集大成として、自治の現場を肌で感じられた大変良い機会となりました。とりわけ、津南町のような小規模自治体がいかに「自律」していくのかという課題は、過疎化や少子高齢化が進む中で、今後さらに重要になると再認識するに至りました。

増田先生、津南町の皆様方に、改めて厚く御礼申し上げます。

GraSPPがGPPNに正式加盟



GraSPPでは、2007年度文部科学省の「大学教育の国際化推進プログラム」に採択された「世界公共政策ネットワーク推進計画」に基づき、ダブル・ディグリー導入とグローバル化に対応する教育基盤の構築に力を入れてきました。その成果として2012年の今年、GraSPPを含む3校(ほかにはドイツのヘルティ・スクール・オブ・ガバナンス、ブラジルのジェットリオ・ヴァルガス財団サンパウロ・ビジネススクール(FGV-EAESP))が正式メンバーとしてGPPN(Global Public Policy Network)に加盟することが決定しました。

GPPNはロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、コロンビア大学国際公共政策大学院、パリ政治学院、シンガポール国立大学リー・クアンユー公共政策大学院の4校からなる世界トップレベルの公共政策大学院のネットワークです。

GPPN
global public policy network

編集
後記

今号は奇しくも学生特集号という様相を呈することとなりました。いつもの学生インタビューをはじめとし、日本で出生したインドネシアの学生の寄稿記事、3月なのに積雪2メートル余りという地でのゼミ合宿をレポートした修了生、教える側から見た素顔の東大生など、東大、そしてGraSPPの学生の多様性をおわかり戴けるのではないかと思います。(編集後記)

NEWSLETTER

第29号

[編集・発行] …… 東京大学公共政策大学院
GRADUATE SCHOOL OF PUBLIC POLICY
THE UNIVERSITY OF TOKYO

[発行日] …… 2012年7月31日

[デザイン] …… 安孫子正浩(水蒸気図案室)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 tel 03-5841-1710 fax 03-5841-7877
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp>